

劇映画 沖繩

50年前に制作された『沖繩』は劇映画だが、当時の実景や現地のロケがたっぷり入っているためドキュメンタリーとしての価値が高い。人々の暮らしと基地のバー街、サトウキビ農業、ベトナムへ出撃するB52などがそのまま映っている。米軍の占領下の沖繩をよくそのままでのロケができたと思う。

また、物語は歴史的な事実に基づいていて、一九五〇年代の「銃剣とブルドーザー」の土地接収に抵抗した闘争や、一九六〇年代の基地労働争議を忠実に再現しており、その時代の暴力的な弾圧や民衆の分裂の中で、勇気を振り絞って運動に立ち上がる人々の姿には胸を突かれる。

50年前に全国を歩き回ってこの映画を自主上映したのは、日本本土における沖繩の連帯運動の初期の活動の一つだった。当時集まった人たちの熱気が感じられる。

現在の辺野古新基地の反対運動のルーツもそこにある。だが半世紀も経ってなお同じ運動が必要だと言うことは、一九七〇年当時の人々の希望や夢を裏切られてきたことを示している。沖繩を抱えている問題の深刻さと膨大さを痛感させられる。

ジャン・ユンカーマン

『沖繩 うちの雨』『老人と海』監督

かいせつ

この作品は本土復帰前の一九六九年に製作上映された作品です。

一九六八年十一月沖繩初の主席選挙で民主統一候補の屋良朝苗氏が当選しました。それは戦後沖繩の歴史を変えうる素晴らしい出来事でした。

沖繩県民の本土復帰への願いがここに結実したわけです。それから一年、沖繩の日本復帰は大きな高まりを示しました。しかし、アメリカの核戦略基地としての日本復帰であるとすれば、それは平和を守る人々のねがいを歪め、同時に歴史の歪曲も意味します。ここに沖繩無条件全面復帰運動の意義がありました。

第一部では土地を奪われた農民たちの怒りと闘いを描いています。

第二部では教育労働者、基地労働者たちの共通した「民族の自覚に燃えた怒り」を主題に、全編を通じ沖繩の即時無条件全面返還の闘いを描いています。



あらすじ

第一部 一坪たりともわたすまい

アメリカに土地を奪われた島袋三郎は、基地周辺の米軍物資を物色していた。

「ウチナンチュ（沖繩人）のものを盗めば泥棒だが、アメリカナのもの盗むのは戦果だ」。これが三郎の生活哲学であった。

アメリカの基地拡張は急ピッチであった。平川部落の強制接収は威嚇射撃で始まった。平川土地を守る会の古堅秀定は、米軍将校に銃をつきつけられ、契約書にサインを強要されたがきっぱりと拒否した。

玉那覇朋子の祖母カマドは戦闘機の機関銃で胸を打ち抜かれ、あたかも軍用地で死んだかのように見せかけられ何の補償もない。

カマドの埋葬は軍用地のなかにあるお墓に白旗ののぼりを立てながら抗議の列となつて進んでいった。

第二部 怒りの島

十年後ベトナム戦争であえいでいたアメリカは沖繩を基地にB52を出撃させていた。戦争が激化する中で基地労働者の労働条件は厳しさを増した。働く者の権利を守り、ベトナム人民支援の闘いに組合はストライキを準備していた。三郎は米軍にスト破りのスパイを強要されるが、一蹴した。

朋子の弟の亘は米軍のトラックに跳ねられ即死した。亘の教師は軍事法廷で「アメリカの民主主義のウン」を糾弾したが、陪審員たちは犯人の無罪を決めた。

ストライキ体制は着々と固められていった。翌朝全基地はシーンと静まりかえっていた。ストライキが決定されたのだった。

6月22日(土)より二週間限定リバイバル上映！！

6/22(土)~28(金) 14:50(途中休憩あり)・18:30終映予定)
6/29(土)~7/5(金) 17:00(途中休憩あり)・20:40終映予定)

料金：1800円均一
★7/1は映画サービスデーにつき1000円均一



ポレポレ東中野

TEL 03 3371 0088
www.mmjp.or.jp/pole2/
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分
地下鉄大江戸線東中野駅A1出口より徒歩1分

★6/22(土)は藤野戸 護(共同映画代表、当時の上映スタッフ)による舞台挨拶あり！ ★6/30(日)は佐々木 愛(主演)による舞台挨拶あり！